

北の鉄道風景

Train number; 231M

2024.4.28 18:31

1/15, f/6.3, ISO 1000, f=31mm, Daylight/Sunny

8256×5504 Raw

第133回

列車たちの花の宴

日本で作曲された最初の西洋楽曲とされる「荒城の月」は、花の宴の描写からはじまる。並べられた燭台の明かりに満開の桜が浮き出るように枝を広げ、その下で城主を囲んで家臣たちが盃をかわす。そこに松の間から月の光が差し込む、という辺りは絢爛豪華の極みのようで、頭の中には高画質テレビや生成AIの動画などよりもずっとクリアでリアルな情景が広がる。しかも一語一語にさまざまな含みを持たせているから掘れば掘るほど味が出る。作詞した土井晩翠の生まれが私の

故郷でもあり、幼い頃から「荒城の月」は身近にあって、この場面も事あるごとに頭の中で再生された。

かくして、花見といえば夜桜派になったのだが、ごった返す人混みの中から桜を見上げる、などというのは興ざめである。ここは限り無く「荒城の月」に近い状況で一人静かに夜桜を見たいものだと思っていた。そして、できれば、私の大好きな列車たちと花の宴を開



桜は朝香る。そんな桜が似合った711系の通勤通学列車は語り草になってしまった。
函館本線 2008



写真と文＝眞船直樹

きたいなどという余計な願望が頭をもたげたあげく、写真に残す、まどくつくものだから、それは無理、で通してきた。

ある春の午後、ずっと引っかかりでいたこの課題に挑戦すべく、やっと腰を上げた。現地に着くと春の宵特有のゆったりした空気が流れていた。シャッターを切ってみる。「荒城の月」には明るすぎる。列車をどう捉えるかを工夫しながら暗くなるのを待っていると次第に列車や桜たちとも会話ができるようになってくる。雰囲気盛り上がり上がってきたのはいいが、写真はさっぱり盛り上がらない。列車のヘッドライトが明るすぎる、桜が暗すぎる、ブレ、ボケを乱発するなか、体だけがどんどん冷えていった。

「荒城の月」ならぬ運の尽きかと真つ暗になった夜道をひとり帰ってきた。画像フォルダーを開けるとゴミばかり出てきたが、中に僅かに「荒城の月」に近づいたものがあるように思えた。「荒城の月」は栄枯盛衰えいこせいすいを歌ったもの。この写真もまたそうなんだろうと思えるものが何枚かあったからだ。 ①